

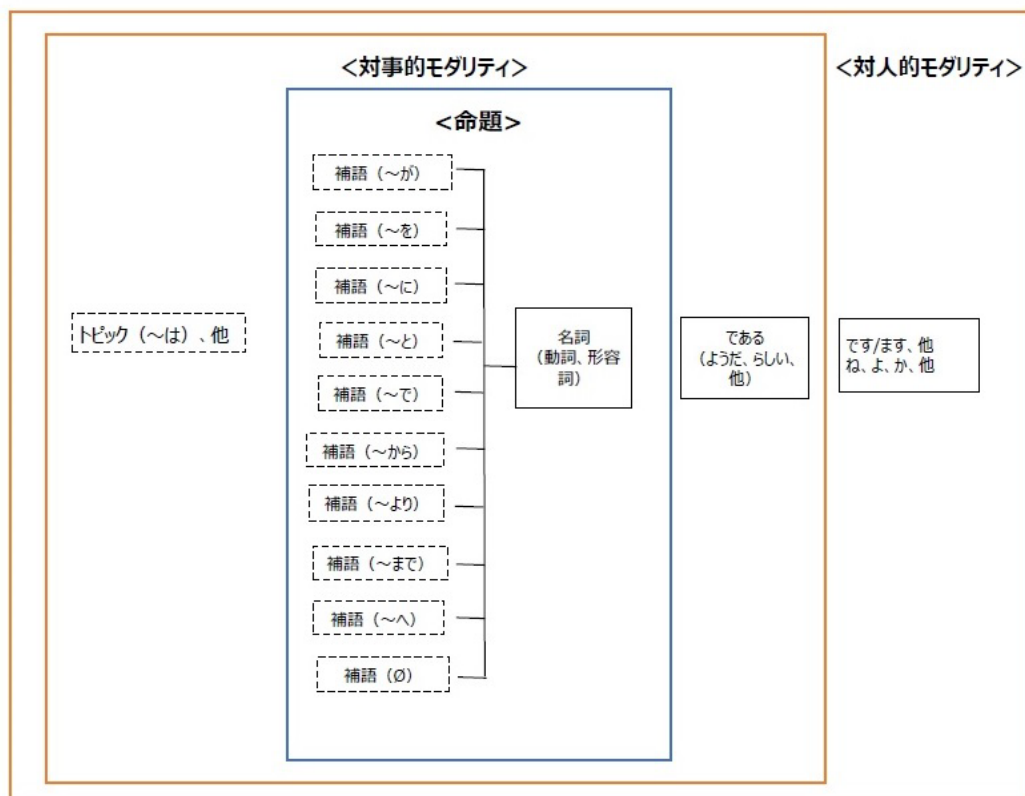
「こころの日本語文法」

〈演習〉

サンプル版

成瀬由紀雄

日本語「文」構造図 2



目次

はじめに

1 思考の分析(1)

認識、判断・態度、伝達

【例題 1】 昨日の試合はペンギンズがベアーズに勝ったようですね。

【例題 2】 吾輩は猫である。

【例題 3】 ちょっと、ないようですねえ。

【例題 4】 いつもお世話になります。

演習問題

このつづきは

「ことさきくグローバル日英文章・翻訳教室」のオリジナル版にて

はじめに

日英・英日翻訳者にとっての最大の課題は翻訳理論・技法ではありません。日本語力と英語力です。翻訳の基盤となるべき日本語力と英語力が十分ではないために翻訳理論・技法を習得してもそれを十分生かすことができないケースが多くみられます。これは本当にもったいないことです。

英語の学習は誰もがそれなりにおこなっていることでしょう。英文法についても当然おこなっているはずです¹。

しかし、日本語文法はどうでしょうか。ほとんどの人が十分な学習をされていないと私は考えます。そしてこのことが私たち日本語人翻訳者にとっての最大の課題なのです。

私たちは中学や高校で学校国文法を学びました。そしてそれを日本語文法そのものであると「無意識」のうちにみなしています。しかし本編で詳しく説明したように実際には日本語文法には数多くの種類があり、学校国文法はそのうちにひとつにすぎません。さらに学校国文法は英文法をお手本につくられ、形態論にしばられたレベルの低い日本語文法でもあるため、私たちはそれを翻訳の基盤に用いることはできません。

では学校国文法の代わりに、どの日本語文法を翻訳の基盤に用いればよいのかといえば、私の推奨は「こころの日本語文法」モデルです。なぜなら「こころの日本語文法」モデルは、心のはたらきを翻訳するために考案された唯一の日本語文法だからです。これを利用することによって、他の日本語文法では生み出せない、認識や思考までをつなぐ訳文をつくりだすことが可能になります。

「演習論」は、その「こころの日本語文法」モデルを皆さんが習得するための具体的なトレーニングの場をご提供するものです。「こころの日本語文法」の本編を読み、このトレーニングをしっかりと行えば、皆さんの日本語力が大きく向上します。どうか頑張ってください。

成瀬由紀雄

1 ただし一般に学習されている「英文法」には本質的な問題点があるのですが、その点については「思考の英文法―演習編」のほうでとりあげます。

1 思考の分析(1)

まず日本語での思考を分析します。日本語での思考を正しく分析することによって、これまで見えていなかった日本語のさまざまな特性が明確に見えてきます。また日本語の思考を正しく分析できる能力は日本語から英語への翻訳の際の重要な基盤ともなります。

認識、判断・態度、伝達

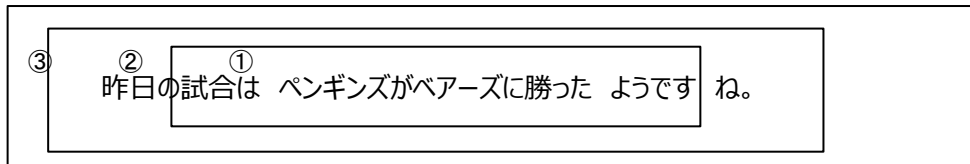
日本語の思考を文で表現する場合には「認識」「判断・態度」「伝達」という3層の入れ子構造になっています。以下、いくつかの例題をつづいて、その特性をみてみることにしましょう。

【例題1】

昨日の試合はペンギンズがベアーズに勝ったようですね。

【解説】

この文の構造を「認識」「判断・態度」「伝達」という3層の入れ子構造として分析してみると、次のとおりです。



①「認識」—「昨日の試合でペンギンズがベアーズに勝った」

②「判断・態度」—「昨日の試合は」「ようだ」

③「伝達」—「です」「ね」

学問的には「認識」を「命題/叙述内容」、「判断・態度」を「対事モダリティ」、「伝達」を「対人モダリティ」などと呼ぶのが一般的です。しかしその内容は「認識」「判断・態度」「伝達」と同じことです。

以下、各要素について簡単に説明をしていきます。

認識（命題/叙述内容）

この日本語文で「認識」されている内容は「昨日の試合でペンギンズがベアーズに勝った」ことです。

判断・態度（対事モダリティ）

「明日の試合は」の「～は」は、「～」の部分とその文のトピック（主題）として扱うという話し手/書き手の「判断・態度」（対事モダリティ）を表している部分です。

同時に、この「～は」は、「昨日の試合で」の「で」の役割も兼務しており、「認識」での役割の一部も担っています。「～は」が、「認識」「判断・態度」の両方の役割を担っているというのは、日本語が持っているユニークな特徴のひとつです。

「～ようです」に含まれる要素「～ようだ」は、「認識」（命題/叙述内容）に対する話し手/書き手の「判断・態度」を示します。ここでの「ようだ」は、「昨日の試合でペンギンズがベアーズに勝ったこと」が断定できずに類推しているという話し手/書き手の判断・態度を示しています。

伝達（対人モダリティ）

「～ようです」のなかの「～です」の部分は、相手に対する「伝達」の部分です。この「～です」は、相手に対する丁寧な気持ちを伝えるという役割を担っています。

日本語では、人に対する「伝達」の部分までを必ず表現しなければなりません。たとえば、「～ようです」のかわりに「～ようだ」にすると、それによって中立的な伝達表現になるのではなく、相手に対する丁寧な気持ちがないという気持ちを伝達する表現になります。この「伝達」（対人モダリティ）の不可欠性が、日本語という言語の最大の特徴のひとつです。なお英語では、この伝達（対人モダリティ）の部分は不可欠な要素ではありません。したがって、話し手/書き手の「認識」「判断・態度」を中立的なかたちで表現することが可能です。

最後に付加する「～ね」も、相手に対する「伝達」（対人モダリティ）の部分です。ここでは、相手に対して確認を求める役割を持っています。この部分は不可欠な要素ではありませんので、別になくてもかまいません。

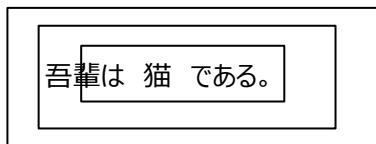
【例題 2】

吾輩は猫である。

〔解説〕

夏目漱石の「吾輩は猫である。」という文で表現されている思考を分析してみます。その結果は、つぎのようになります。

- ①「認識」：「わたしが猫であること」
- ②「判断・態度」：「わたしは」「である」
- ③「伝達」：「吾輩」「である」



認識（命題/叙述内容）

ここでの「認識」（命題/叙述内容）は、「わたしが猫である」ことです。

判断・態度（対事モダリティ）

ここでの「判断・態度」（対事モダリティ）の第 1 は、「～は」をもちいて「わたし」をトピック（主題）とするという判断・態度です。もし「わたし」ではなく「猫」のほうをトピック（主題）とする判断をおこなっていれば、「吾輩は猫である。」ではなく「猫は吾輩である。」という表現になっていたはずですが。

ここでの「判断・態度」（対事モダリティ）の第 2 は、「～である。」によって断定をしている判断です。日本語の「である」には、強い断定の判断・態度が含まれています。例題 1 での「ようだ」が弱い判断・態度であることとは判断・態度内容は違うものの、それがはたす役割としては同じものです。

伝達（対人モダリティ）

この文で「伝達」の役割を果たしているのは、「吾輩」「～である」という表現です。

「吾輩」は、聞き手/読み手に対して話し手/書き手の社会的ポジション（ここでは男性、年配、など）を伝達するための表現です。これを、「わたし」「わたくし」「僕」「オレ」「あたい」などにすると、別の社会的ポジションを聞き手/読み手に伝達することになります。

「～である」は、うえの「判断・態度」の項で述べた強い断定の判断・態度とともに、自分が聞き手/読み手に特に丁寧な気持ちも表現しない、ということを相手に対して伝達しています。そのため、一般的には中立的ではなく、少し横柄なイメージとなります。そのため、話し言葉では用いることがほぼ不可能です。

【例題 3】

ちょっと、ないようですねえ。

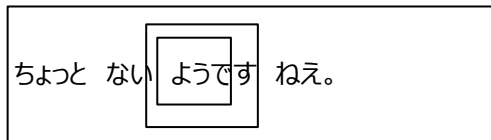
〔解説〕

「こころの日本語文法」でも紹介した『日本人と中国人とのコミュニケーション』（彭飛、和泉書院）のなかの日本語文です。繰り返しになりますが、このセリフは、次のような状況で話されました。

あるときポンフェイ氏がお店に入って「××はありませんか？」とたずねたところ、その店主が店の中をひととおり探したあとで「ちょっと、ないようですねえ。」と答えました。ポンフェイ氏はこの店主の言葉にとっても驚いたそうです。というのは、店主はポンフェイ氏の目の前で店の中を探してそれでも品物はなかったのですから「ありません」で十分でないのかと思ったのです。ところが実際には「ちょっと、ないようですねえ」。日本語の勉強をはじめたばかりのポンフェイ氏には、この「ちょっと」が何なのか、「ようですねえ」がどういう意味なのかが、まったくわからなかったそうです。

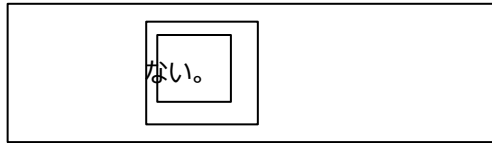
この「ちょっと、ないようですねえ。」を分析すると、次のとおりです。

- ①「認識」：「（品物が）ないこと」
- ②「判断・態度」：「ない」に含まれる断定
- ③「伝達」：「ちょっと」「ようです」「ねえ」



ここでの「認識」は「（品物が）ない」ことです。それだけです。したがって、中国語や英語のように、文において「認識」「判断・態度」「伝達」の3層を必ずしも表現する必要のない言語であれば、ポンフェイ氏のように「ない。」（少し丁寧にすると「ありません。」）で、言語表現として必要かつ十分です。実際、同じ場面であれば、英語ならば「No」、中国語ならば「没有」だけを述べて、おしまいにするのが普通です。相手への気遣いについては、表情やジェスチャーで伝えます（あるいは、それも伝えないのが一般的かもしれません）。

しかし、「認識」「判断・態度」「伝達」の3層を必ず表現しなければならない日本語の世界では、決してそうはいきません。もしも日本語で店の主人が、この場面で「ない。」などと答えたとしたら、それは伝達機能としてはニュートラルな伝達ではなく、非常に無礼な伝達であることは明らかです。



ていねい体を用いて「ないです。」「ありません。」としても、それではやはり相手への気遣いがまだ足りないと、日本語人であれば自然と考えます（ここがポンフェイさんに理解できなかったところです）。

そこでどうするかといえば、わたしたち日本語人は「ちょっと」「ようですねえ」といった表現をつけるのです。このように、判断・態度を曖昧化することやさまざまな伝達の表現を加えることによって、私たち日本語人は相手への気遣いを表します。

日本語では、「～のようだ」「～らしい」「～だと思う」「～かも知れない」というような本来ならば「判断・態度」を示す表現を、相手への気遣いを示す「伝達」の表現として使うケースが、非常に多くあります。「そのようです。」「そうらしいです。」「そうだと思います。」「そうかも知れませんね。」などです。これらの表現は、一見すると英語の it seems や I think や It may に対応するように見えますが、多くの場合、そうではありません。ですから、日英翻訳の現場では、じつは敢えて訳さないことがもっとも適切な訳出になることが多いのです。

【例題 4】

いつもお世話になります。

【解説】

うえに述べた「認識」「判断・態度」の表現を「伝達」（気遣い）へと転用している日本語人の言語使用の究極の例が、「いつもお世話になります。」「どうぞよろしくお願いします。」といった表現です。これらの表現を分析するとすれば、つぎのようになります。

- ①「認識」：なし
- ②「判断・態度」：なし
- ③「伝達」：「いつもお世話になります。」「どうぞよろしくお願いします。」

つまり、こうした表現には「認識」「判断・態度」にあたる内容はなく、たんに「伝達」の一形態として相手への気遣い（礼儀）を示しているにすぎないのです。

当然ながら、これにそのまま対応するかたちでの英語や中国語への翻訳は不可能です。それにしても会ったこともない人にはじめてメールを送る際でさえ「いつもお世話になっております。」ではじめるというのは、（もちろん会社としてお世話になっているという意味でしょうが）いかななものでしょうか。わたしのようひねくれ者は、そんなメールが届くと「べつにお世話なんか、してないぞ。」などとついつい思ってしまいます。

演習問題

問 1 次の手紙文のなかの文をそれぞれに「認識」「判断・態度」「伝達」の 3 層に分けてください。

貴社ますますご清栄のことと大慶に存じ上げます。山田商事 営業部の山田太郎でございます。

さて、おかげさまで小社は来る〇〇月〇〇日に創立〇〇周年を迎えることとなりました。これもひとえに皆様方のご高配の賜物と厚く御礼申し上げます。

そこで、創業以来前進して参りましたことを皆様方に深く感謝し、下記の通り心ばかりの記念パーティーを催したいと存じます。ご多用中のところ、まことに恐縮ながら、何とぞご光栄の栄を賜りますようお願い申し上げます。

まずは、略儀ながら書中をもちましてご案内申し上げます。

問 2 問 1 で 3 層に分けた各文の「伝達」の部分をカットして「認識」「判断・態度」だけの文をつくってください。

問 3 次の報道文のなかの文をそれぞれに「認識」「判断・態度」「伝達」の 3 層に分けてください。

日本銀行は 29 日から金融システム安定化の一環として、民間銀行の保有する株の買い取りを始めた。買い取りの対象は保有株式が中核的自己資本の範囲を超える大手行や地方銀行。初日はりそなグループや中央三井信託銀行など数行が数十億円規模で買い取りを要請した模様だ。03 年 9 月までに 1 行あたり 5000 億円を上限に、総額 2 兆円をめどに買い取る計画。ただ、どれだけ活用されるかは未知数だ。日銀への株売却に「難色を示す取引企業も少なくない」（大手行幹部）。

問 4 次のエッセイ文のなかの文を、それぞれ「認識」「判断・態度」「伝達」の 3 層に分けてください。

専門家に伺ったところでは、動物の雄が配偶者を選ぶ基準は、まず雌として生活力旺盛なこと、次に繁殖力、そして子育てが上手なことだという。人間からみて、あら可愛いいわね、などというのは、彼らの目には入っていないらしい。雌が雄を選ぶ基準は、まず強いこと。おしっこ臭い匂いを発散させ、好色であることだという。

問 5 次の小説文のなかの文を、それぞれ「認識」「判断・態度」「伝達」の 3 層に分けてください。

四月六日に縁から手紙が来た。四月十日に科目登録があるから、その日に大学の中庭で待ちあわせて一緒にお昼ごはんを食べないかと彼女は書いていた。返事はうんと遅らせてやったけ

れど、これでおあいこだから仲直りしましょう。だってあなたに会えないのはやはりさびしいもの、と
緑の手紙には書いてあった。

このつづきは

「ことさきくグローバル日英文章・翻訳教室」のオリジナル版にて